野殿・童仙房での生涯学習の取り組み　2008年度

1．はじめに

2006年度、2007年度と順調に年を重ねてきた野殿・童仙房地区での取り組みも３年が終わろうとしています。最近、２月に「野殿童仙房生涯学習推進委員会」の役員さんたちが京都大学にいらっしゃって矢野研究科長と話し合いをもたれ、今後も京都大学大学院教育学研究科と野殿・童仙房地区が引き続き連携を進めていくことの再確認をしました。以下、今年度行なった取組みを中心に全体を振り返っておきたいと思います。

2．大学と地域を結ぶ—広報誌『風と雲の便り』

広報紙『風と雲の便り』も、おかげさまで12号まで刊行することができました。地域の人に私たちの活動の概要を知っていただくというのが主な役割ですが、それだけではありません。歴史の異なる野殿と童仙房の二つの地域は、隣接していますが、どうやらお互い同士あまり詳しく知らないようです。たとえば、野殿の古くからある伝統的な祭事について、童仙房在住の人は知りません。私たちの広報誌が、両地域がこれまで以上に相互に理解しあえるための媒体になることも願っています。

3．「おいしい音」を食べる
— 創作料理から学ぶもの

昨年度同じ時期に行った企画「味覚と他の感覚を重ねあわす—もうひとつの生涯学習」が好評だったので、この企画を発展させた料理と講義の２本立ての学習を５月に「『耳を澄ます料理』を味わう！」というテーマで行いました。講師はおなじみのsun-aid Eisuke 店主、阿山哲生さんです。今年度は、五感の中で、料理に際して比較的忘れられている感覚、聴覚を軸にして迫ってみました。地元の旬の食材を使った料理が出来上がって行く過程を、さまざまな音に耳を澄ましながら楽しむというのは、あまり例を見ないのではないでしょうか。

聴講された方の中に目の見えない人もいらっしゃったのですが、とても面白がってくれていました。

4．語り口の面白さ—紙芝居というメディア

語り口の面白さといえば、今年一番印象に残るのは、７月の「風と雲の広場」で行った、昔ながらの「紙芝居」の実演です。これは京大の紙芝居研究会の諸君がサポートして実現したものです。安野侑志さんという本職の紙芝居師さんの口演と子どもたち自身が創作紙芝居を作るワークショップは、子どもだけでなくおとなも楽しめる企画でした。内容の面白さに加えて、その独自の語り口と紙芝居師さんと子ども（おとな）とのやり取りは、まさに抱腹絶倒ものでした。かつて童仙房に在住し、町に降りてから文房具店を営んだことのある方がわざわざこの紙芝居を見るためにやってきてくれたことも嬉しい出来事でした。（「風と雲の広場」のために文房具をご寄付していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。）同研究会のメンバー、馬場智子さん（大学院生）も書いているように、「自分の気持ちを発することの楽しさ、人の思いを聞くことの面白さ」にみちあふれた充実した時間だったと思います。

5．不思議と面白さの取り合わせ
—万華鏡とブーメランつくり

同じ「風と雲の広場」の催しのなかで、昨年に引き続き、江角陸先生にお出でいただき、万華鏡やブーメランの制作の指導をお願いしました。出来上がった万華鏡やブーメランを見ると、あまり経費をかけてなくても、入念な準備をすることでこれほどのものが出来るのかという驚きで一杯になります。子どもたちに、不思議と驚きの心を持って科学を学んでもらおうとする江角先生の静かな情熱がいつも伝わってきます。

6．リズム感覚を学ぶ―野童太鼓を聴く

僻地が好きで野殿童仙房小学校の教員を永く務め、ついに野殿の住民にまでなられた馬場正幸先生の指導の下、中学生や高校生の教え子たちが力強く和太鼓を敲くのは圧巻です。野殿と童仙房の一文字を取って結成されたサークルのネーミングも素敵です。

7．専門家の地域への関わり ―「なぜ心理学者が地域に足を運ぶか」

４月早々に、フィールドに実践的な関心をもって、自らも研究室を飛び出してさまざまなフィールドに入っていっている心理学者（やまだようこ、杉万俊夫、永田素彦各先生）を招いて、シンポジウムを持つ機会を作りました。この企画は、グローバルCOEとのジョイント企画でしたが、このテーマは、とても普遍的なテーマで、「心理学」と「地域」という取り合わせが面白かったからでしょうか、シンポジウムでは、地域の人からも熱心な質問が続出して大変盛り上がりました。

8．大学院生の地域への関わり ―「経験知と学知の境界線を超えて」

９月には、グローバルCOEプログラム「EXラボ」の企画の一環として、お互いに関心も専門領域も異なる７名の大学院生たちが、初めて野殿・童仙房の地を訪れました。この地域についてのレクチャーを受けたり、実際に散策をしたり、夜は元の校庭で地域の人たちを交えたバーベキューパーティーを行ないました。地域への関心を深めたのは勿論ですが、自らの研究を見つめなおすきっかけにもなったようです。

▶童山房の開拓碑とともに

9．「普通」の人のライフヒストリーを聴く ―「私を語る」

昨年度に引き続き、生しいたけを栽培している櫛田豊久さんにお世話になりました。櫛田さんは、都会から童仙房へ移住してきたいわゆるＩターン組みの一人で、しいたけ栽培は０（ゼロ）から出発した人です。クヌギやコナラの自然木による栽培によってつくられた生しいたけを焼いて塩だけの味付けでいただきながら、しいたけが栽培されるまでをわかりやすくパワーポイントで図示して教えていただきました。しいたけといえば、スーパーで売っているものしか知らない若い学生にとって、採れたての原木栽培のしいたけの味が、どんなにおいしいものか、身をもって体験したと言えましょう。同時に、何故櫛田さんがこの地でしいたけ栽培を始めたかという疑問から自らのライフヒストリーを語ってくれました。

10．遠回りしながら学ぶ―農業体験「うねうね」

今年度は、「昔子どもだったおとなと今の子どもと未来の子どものための農業体験」から「うねうね」という名称に変えて地域の人たちと京大生とともに畑作業に取り組みました。種まきから間引き、草引きを経て、秋にはいろいろな野菜を収穫し、皆で収穫を喜ぶために収穫祭を持ちました。

11．聞き取り調査活動の開始

今年度の特徴といっていいと思いますが、ようやく私たちが学校という空間から一歩踏み出て、暮らしや歴史について地域の人から直接お話を伺う機会を得られるようになってきました。お茶刈り、冠婚葬祭、開拓の歴史などについて、学生たちがそれぞれ自分の課題を持って体当たり的に聞き取りをした記録は、「風と雲の便り」（第11号）やコロキアム報告書にも報告されています。来年度から本格的に実施予定の調査活動の第一歩として位置づけています。

▶六所神社（野殿地域）

なお私たちの活動の一端は、ＡＢＣ朝日放送のラジオ報道番組「おはよう！ニュース探偵局」（７月15日～19日）の早朝５分間のシリーズで報道されています。

また、より詳しいことについては、野殿童仙房生涯学習推進委員会のホームページ（http://souraku.net/manabi/）を設けていますのでそちらを参照して下さい。

（文責：前平　泰志）